

長野県革新懇ニュース

2017年7月号
発行日 7月10日
会費 2,000円
購読料 3,000円(送料込)
振替 0510-3-15971

217

発行 日本と信州の明日をひらく県民懇話会
(長野県革新懇) 発行人: 山口光昭 編集長: 高村裕
〒380-8790 長野市県町593 高校教育会館内
TEL: 026-234-1231 FAX: 026-234-2219 メール: mail@nagano-kakushinkon.com

====今号の主な記事====

- 1面 東栄蔵さんインタビュー
- 2面 1面続き、近現代信州の歴史回廊
- 3面 国連会議で「禁止条約」採択へ
- 4面 随筆「真田騒動」堀井正子さん
映画評論「スノーデン」
読者のこえ・各地の動き、クロスワードパズル

長野県革新懇

検索



多くの県民の声を寄せ

県立の信州文学館を

東 栄蔵さん
(文学研究者)

山紫水明の地・信州は
近代文学のふるさと

Q 近著『心の血縁を求めて』の中で「信州文学館」の設立を呼びかけられています。動機や構想についてお話しください。

20年ほど前に郷土出版社が『長野県文学全集』をつくるという企画を立てました。本格的な「県版」の文学全集は全国どこにもなかった頃です。長野県は素晴らしい文学者を多数輩出していますし、また、山紫水明の地ですから、ここを舞台にした作品が非常に多いのです。何年か経ってもいいから、全国で初めて、「近代文学のふるさと」と言われている信州にふさわしい『長野県文学全集』をつくることになったわけです。

私も、井出孫六などともに編集委員を頼まれて、神津良子編集長のもとで作品の収録に関

わりましたが、全37巻の作品を完結するのに、約9年かかりました。私が編集委員として歌人の齋藤史を訪ねたとき、齋藤史は、いろいろと話してくれましたけれど、いちばん心に残っていることは「私、講演なんか頼まれて、全国各地の都市に行きますけど、たいいていその県都に県立文学館があつて、多くの県民や市民に親しまれています。ところが、「近代文学のふるさと」と言われている長野県には文学館がありません。これはたいへん残念です。」と、繰り返し言われたことです。そのことが非常に心に残っていて、有志に働きかけたのですが、当時は皆オリンピックの方を向いていて、機運が全く盛り上がりませんでした。

しかし、お隣の甲府や金沢にも素晴らしい県立文学館があり、親しまれています。だから、ぜひ実現したいという思いはずっともっていたので、近著の『心の血縁を求めて』にも「信州文学館」設立のメッセージを収めたわけです。信州には、一茶を筆頭として、近代になつてから日本の自然主義文学の嚆矢とも言われる島崎藤村、短歌では島木赤彦、窪田空穂、詩では平野光子、童話作家では椋鳩十などが全国的に知られています。ざっと数えてみても約400名近くの後継者が、信州の文学史に名を残してもよい人たちです。ただ、それを所蔵する場所がなく、散逸してしまっているわけです。たとえば、15年前に亡くなった齋藤史のことですが、全国に先駆けて短歌の文学賞をもらいましたが、その資料を収める場所が信州にないのです。

実は2年前に発刊した『みす

ずかる 信州の文化とわが軌跡』の中ですでにこの提案をし、私の約1万冊の蔵書を寄贈したいと表明しました。多くの皆さんから反響が寄せられたのですが、なかでも二松学舎大学の客員教授で一茶研究で有名な矢羽勝幸が、「信州にこそ文学館は必要だ。私も大賛成なので、俳書など数千冊を寄贈する用意がある。」という具体的な提案をされてきました。矢羽は、親しくしている上田女子短期大学教授で長野県国語文学会会長の中西満義と相談して、東の提案を実現しようということになったようで、去年の5月7日にお二人が私を訪ねて来られました。それで、3人で話し合つて、よしやろうということになって

ね。趣意書をつくり、3人が発起人になつて出発したわけです。その後、発起人が3人では事が大きすぎるからということで、9人にし、賛同人も約40人にして10月20日に信州文学館設立総会を行いました。山梨近代文学館館長を講師に招いて。

今年1月には、代表が県知事に会つて構想を打ち明けました。知事は、文学や美術などの芸術には理解があると私は思いました。知事ですら、すぐやります、お金をしますとはすぐには言わないけれど、そういう構想は信州の文化にとつては大事なことで共感を示しました。

これまでに発起人が2回集まつて、どう進めたらいいか相談しまして、今までは個人的な交渉が多かつたわけですが、もうではなくて下伊那の阿智村にある「満蒙開拓平和記念館」の例になつて、多くの個人や団体の皆さんに信州近代文学館がぜひとも必要だという声を上げてもらおうと、2年目はそこに

文学を読むことは
想像力を培うこと

Q 文学の価値や魅力についてお聞かせください。

文学がなぜ必要かということですが、今やスマートフォンやインターネットの時代になり、苦勞しないで自分の好きなものが手に入るようになりました。一方で、嫌いなものは遠ざけるようになりやす。そうすると、知性や感性は平凡になり、左側か右側、底辺も見えないで、平板な文化になつてしまっています。つまり、文化の深さや広さ、背後が見えなくなり分断社会になつてしまう恐れがあります。それを避けるためには、全体を見通すことのできる想像力(イマジネーション)が必要です。

想像力を高めるためには文学を読むことが必要であり、文学を読むことによって想像力を培うことができ、21世紀の文化をもっと深くし高めることができるのではないかと思います。新田次郎の次男で、数学者の藤原正彦が「数学や理科の創造力を高めるためには文学を読むことが必要だ。」と言っているし、若月俊一佐久総合病院長も「人間を本心に看る医者になるためには文学を読むことが必要。ただ医師の仕方だけを学ぶだけではダメだ。」と言われていましたね。それから私が感心しているのは、大町に住んでいる芥川賞作家の丸山健二です。彼の異色作はいろんな

反響を呼んだ『破戒』と
伊藤千代子の研究

Q 『破戒』研究と伊藤千代子についてお聞かせください。

何と言っても島崎藤村の『破戒』が私の文学研究の原点です。『破戒』は、日本の近代自然主義文学の先駆的な作品。ただ、発刊当時から今日に至るまで、統一的な評価というのがなかなか出ないのです。つまり、評価が分極しているのです。一つは、小説という狭い範囲の中で『破戒』の評価と、もう一つは部落解放同盟という運動体の論理での評価があつて、それが対立しそのままになっている。これではまずいのではないかと考えて、統合的な評価を出すことが『破戒』研究のいちばん大事なことだという問題意識があつたので、そのことを一生懸

【2面に続く】